

論文の和文要旨

論文題目	17 世紀末および 18 世紀初頭フランス語におけるリエゾンの分析 —Milleran (1694)および Vaudelin (1713, 1715)の文献調査を基に—
氏名	近藤 野里
<p>本論文の目的は、17 世紀末および 18 世紀初頭におけるフランス語のリエゾンについて明らかにすることである。先行研究において、この時代のフランス語におけるリエゾンはあまり注目されてこなかった。これは、音声現象であるリエゾンをそもそも実際に録音された音声からではなく、文献調査においてどのように研究できるのかという問題点があるからである。本研究では、17 世紀末および 18 世紀初頭に 2 人の異なる著者によって書かれた、語末子音字の発音有無を確認することが可能な文献をコーパスとして使用することで、この問題点を克服するように努めた。また、語末子音字の発音およびリエゾンについての説明が書かれた 16 世紀以降の文法書を調査することで、コーパス調査から得られた結果を補強できると判断した。本研究では 17 世紀末および 18 世紀初頭に 2 人の異なる著者 René Milleran と Gile Vaudelin によって書かれた文献をコーパスとして、語末子音字の発音およびリエゾンの実現について分析を行った。これによって、この時代のフランス語におけるリエゾンが実際にはどのようなものであったかを明らかにした。次に、2 つのコーパスを比較することによって、リエゾンの実現に対するスタイルの違いの影響、そしてリエゾン子音[z]および[t]の形態的マーカーとしての機能の進化を観察した。本研究は基本的には共時態を対象とするが、通時的变化についても注意を怠らないように努める。また、リエゾンに関する通時的变化についてはこれまで体系的な研究がないため、これは本研究の意義の一つであろう。</p> <p>リエゾンに関する研究は、特に 20 世紀以降、規範的研究、記述的研究、社会言語学的研究、理論的研究といった、言語学の幅広い分野において様々な方法論が用いられた。リエゾンという現象に対する幅広い分野からの関心の理由は、2 つの語の間で起こる子音が発音される現象であるリエゾンのメカニズムの複雑さであろう。少なくとも現代フランス語においては、言語内的要因および言語外的要因といった 2 つのタイプの要因がリエ</p>	

ゾンの実現および非実現に影響すると考えられている。本研究が特に関心を抱くのは、17世紀および18世紀のフランス語において既にこのような要因が存在していたのかということである。

本論文の構成は以下の通りである。

序論では、本研究の背景、目的、章構成について述べた。

第二章では本研究の研究対象であるリエゾンおよびその他のサンディ現象（アンシェヌマン、エリジオン、周辺のリエゾン）について特に現代フランス語の観点から一般的な定義を与えた。フランス語はサンディ現象を豊富に内在させる言語であることから、フランス語における「語」に定義を与えることは重要であり、この語の定義には綴り字との関係性が欠かせないと言われている。よって、語を定義するための綴り字の重要性についての考察を行った。次に、リエゾンが実現される場合に発音されるリエゾン子音の特徴について提示し、他の子音とはどのような点で区別されるかについて説明した。また、周辺のリエゾンとして興味深い現象である、アンシェヌマンのないリエゾン、間違っただリエゾンについての説明を行った。終わりに、リエゾンの実現コンテキストの分類（義務的、選択的、禁止的）について説明した。

第三章では、20世紀および21世紀の先行研究で論じられたリエゾンの特徴およびリエゾンの実現に関する要因について要約した。先行研究は大きく4つのタイプに分類することができる。この4つのタイプとは規範記述的研究、コーパスに基づいた記述的研究、社会言語学的研究、理論的研究である。まず規範的記述研究においては「リエゾンはどのように実現されるべきか」という姿勢が見られる。つまり、リエゾンの実現および非実現に関する基準をフランス語話者およびフランス語学習者に与えることがこの研究の成果でもある。次に、記述的研究は実際に話されたフランス語を観察することで、「リエゾンはどのような場合に実現し、その実現にどのような要因が影響するのか」という問いに対する答えを提示しているといえる。社会言語学的研究は「リエゾンの実現および非実現はどのような社会言語学的特徴を反映するのか」という問いに答えることに寄与したといえる。理論的研究では、音韻論および形態論の枠組みの中で、リエゾン子音の位置について多くの議論がなされた。統語論においては、統語構造の分析によって、義務的リエゾンおよび選択的リエゾンの区別が試みられた。リエゾンに対する研究が言語学の複数の分野で行われる大きな理由は、リエゾンという現象が形成された通時的変化の過程において、少しずつ複雑性を増していったためである。

第四章では、フランス語においてリエゾンという音韻現象が形成された3段階の過程を文法家の証言と並列しながら観察した。また、16世紀半ばから18世紀にかけて規範の

整備がどのように進化したのかについて説明した。そして、特に 16 世紀半ばから 18 世紀にかけて出版された文法書において、語末子音字の発音に対して、またリエゾンに対してどのような説明がなされていたのかを概観した。リエゾンがどのような場合に実現されるかについては、Chiflet (1659)や Hindret (1687)が「制御される語」という概念を導入して、リエゾンの実現が語と語の間にある統語的結束性に支配されていることを示している。ただし、リエゾンについての説明というのは、この時代の文法書において体系的に行われたわけではなく、離散的にいくつかの重要な点についての注意書きが観察されるに留まる。この注意書きに関する説明には、(1)スタイルの違いに対する考慮、(2)ある特定の統語的コンテキストにおける指摘、(3)ある特定の語に関する指摘、の主に 3 つのタイプが観察された。

第五章では、本研究で使用する 2 つのコーパスについて、そしてコーパスの作成方法について説明した。また、先行研究と本研究との違いを強調すること、そして 2 つのコーパスを比較することで得られると考えられる仮説を紹介することで、本研究の位置付けを明白にした。Milleran と Vaudelin、両人とも「良き発音」を教えることを目的としているが、それぞれの本の趣旨は少し異なる。まず Milleran の書は文法書であり、発音に対する説明書きが多い。これに対して Vaudelin の書では、特に祈りと教理問答が発音記号で記されていることが特徴的である。この違いから Milleran コーパスでは文語的な、そして Vaudelin コーパスではより口語的なフランス語の発音が観察されると考え、これら 2 つのコーパスにおいてスタイルの違いが観察されるという仮説を立てた。終わりに、本研究で使用する語末子音字の発音有無を示すコードと品詞タグについて説明した。

第六章および**第七章**では、17 世紀末および 18 世紀初頭に 2 人の文法家 Milleran (1694) および Vaudelin (1713, 1715)によって書かれた文献をコーパスとして、語末子音字の発音およびリエゾンの実現・非実現を観察し、記述を行った。

第八章では、2 つのコーパスを比較し、類似する傾向および異なる傾向を観察することで、リエゾンの実現傾向の一般性を分析した。それを踏まえて、特に語の長さと言節構造といった言語内の要因、リエゾン子音[z]および[t]の形態的マーカーの機能の成立、そして 2 つのコーパスで用いられたスタイルの違いについて考察した。両コーパスの比較によって明らかになったことは以下のような点である。

- (1) 語の長さのリエゾン実現への影響：2 つのコーパスにおいて、リエゾンの実現における MOT1 (左側の語) の音節数の影響は顕著であった。単音節語のリエゾンの実現率が高い理由として、冠詞 (*un, des, les, mon, ton, son, mes, tes, ses, vos, nos, leurs, etc*)、人称代名詞 (*il, nous, vous, ils, elles, en, les*)など、リエゾンの実現率が高い品詞がそもそも単音節であるということが考えられる。

- (2) 語の音節構造のリエゾン実現への影響：MOT1 の語末の音節構造がリエゾンの実現に影響することも観察された。両コーパスにおいて開音節語末の語のリエゾン実現率は、閉音節語末の語のリエゾン実現率よりも高いことが観察された。つまり、母音接続がある場合には、リエゾンの実現が優先される可能性が高く、MOT1 の語末で子音が安定的に発音されるような場合には、リエゾンの実現はそこまで優先的であるわけではないと解釈することもできる。
- (3) 複数性マーカーとしての[z]:「複数形形容詞+複数形名詞」、「冠詞 *quelques, plusieurs*」、「複数形名詞+複数形形容詞」のようなコンテキストにおいて、複数性という形態的機能を持つと考えられているリエゾン子音[z]は常に安定的に発音されるわけではないことが、両コーパスの分析から明らかになった。リエゾン子音[z]がこの時代に必ずしも複数性マーカーとして機能していたわけではないことが考えられる。
- (4) 三人称マーカーとしてのリエゾン子音[t]：両コーパスにおいて動詞の三人称単数の屈折形のリエゾン実現率が非常に高いことが確認された。三人称単数形と比較すると、三人称複数形のリエゾン実現率は特に高いとはいえず、韻文・演説でなければリエゾンの実現は義務的ではないというような文法家の証言が目立つ。このことから、リエゾン子音[t]が形態的機能を示すマーカーとなりえるのであれば、三人称単数形マーカーという限定された機能を持ち得るとも考えられる。
- (5) スタイルの違い：Milleran と Vaudelin のコーパスにおけるリエゾンの実現を比較した場合に、様々なリエゾンコンテキストにおいて、Milleran コーパスにおけるリエゾン実現率は Vaudelin コーパスのものよりも高いことが明らかであった。特にこの2つのコーパス間の顕著な違いとして、韻文の朗読において推奨されている「+接続詞 *et, ou*」および「名詞+動詞」のコンテキストにおいて、Vaudelin コーパスではほとんど、もしくは全くリエゾンの実現が観察されないのに対して、Milleran コーパスではそれなりの頻度で観察されることである。以上の点から、Milleran コーパスでは文語的なスタイルにおけるリエゾンの実現、そして Vaudelin コーパスでは口語的なスタイルにおけるリエゾンの実現が観察できると結論付けた。

最終章は結論の章であり、第六章から第八章までに行った分析や考察を結論としてまとめた。終わりに、今後の課題について述べた。